

杉本博司 本歌取り 東下り

HIROSHI SUGIMOTO HONKADORI AZUMAKUDARI

2023年9月16日(土)-11月12日(日)

前期:9月16日(土)-10月15日(日) 後期:10月17日(火)-11月12日(日)

※会期中、一部展示替えがあります



①杉本博司
《カリフォルニア・コンドル》1994年
ピグメント・プリント 作家蔵
©Hiroshi Sugimoto

杉本博司（1948～）は、和歌の伝統技法「本歌取り」を日本文化の本質的営みと捉え自身の作品制作に援用し、2022年に姫路市立美術館でこのコンセプトのもとに「本歌取り」展として作品を集結させました。

本歌取りとは、本来、和歌の作成技法のひとつで、有名な古歌（本歌）の一部を意識的に自作に取り入れ、そのうえに新たな時代精神やオリジナリティを加味して歌を作る手法のことです。作者は本歌と向き合い、理解を深めたうえで、本歌取りの決まりごとの中で本歌と比肩する、あるいはそれを超える歌を作ることが求められます。西国の姫路で始まった杉本の本歌取り展は、今回、東国である東京の地で新たな展開を迎えることから、「本歌取り 東下り」と題されました。本展を象徴する作品である《富士山図屏風》は、東国への旅中に、旅人が目にする雄大な富士山を描いた葛飾北斎の《富嶽三十六景 凱風快晴》を本歌とした新作で、本展で初公開となります。

またこの他にも、書における臨書を基に、写真暗室内で印画紙の上に現像液又は定着液に浸した筆で書いた《Brush Impression》シリーズなど、本展は新作を中心に構成される一方、中国宋時代の画家である牧谿の水墨画技法を本歌とした《カリフォルニア・コンドル》など、杉本の本歌取りの代表的作品も併せて展示します。さらに、室町時代に描かれたと考えられる《法師物語絵巻》より「死に薬」を狂言「附子」の本歌と捉え、その他の8つの物語と共に一挙公開致します。

現代の作品が古典作品と同調と交錯を繰り返し、写真にとどまらず、書、工芸、建築、芸能をも包み込む杉本の世界とその進化の過程をご覧ください。



初公開作品 ②杉本博司《富士山図屏風》2023年 ピグメント・プリント 作家蔵 ©Hiroshi Sugimoto

葛飾北斎の《富嶽三十六景 凱風快晴》で描かれた赤富士を本歌とし、本展のために制作された新作。北斎の赤富士が描かれたと推測される、山梨県三ツ峠山からの富士山の姿をとらえています。



新作

③杉本博司《Brush Impression 0625 「火」》2023年 銀塩写真 作家蔵

©Hiroshi Sugimoto

④杉本博司《Brush Impression いろは歌 (四十七文字)》(部分) 2023年

銀塩写真 作家蔵 ©Hiroshi Sugimoto
【前期展示】

文字の起源とは何なのか、そして文字によって生み出される言葉の意味とは — 杉本はこの大いなる問いに向き合い続けています。新作であるBrush Impressionシリーズは、写真暗室において、印画紙の上に現像液もしくは定着液に浸した筆を用いて文字を書いたもの。「書」と「写真」の技法を融合させて制作される本シリーズは、まさに杉本独自の発想によって生み出された作品といえるでしょう。



本展を開催する渋谷区立松濤美術館は、建築家の白井晟一（1905-1983）によって設計されました。そのユニークなスタイルから「哲学の建築家」とも評された白井は、建築だけでなく、「中公新書」などの装丁デザインや、執筆活動も行ったほか、晩年は書家としても精力的に活動しました。《瀉嘆》（しゃたん）は白井による書のひとつ。杉本が所有する作品です。

また、白井が晩年に設計した邸宅「桂花の舎」は、今後、小田原文化財団江之浦測候所がある「甘橘山」（かんきつざん）に移築されることになりました。白井が生きていたら、と自身に問いながら行うという移築作業は、杉本にとって白井建築を本歌とした「本歌取り」なのです。

本展では、杉本所蔵の白井の書のほか、計画が進む移築後の桂花の舎の模型などを展示します。そしてなにより、白井が生み出した空間で、杉本作品を鑑賞する本展は、まさに両者のコラボレーションともいえるでしょう。

⑥白井晟一《瀉嘆》昭和時代(20世紀後半) 紙本墨書 杉本博司蔵

©Hiroshi Sugimoto



⑤杉本博司《フォトジェニック・ドローイング015:タルボット家の住み込み家庭教師、アメリカ・ペティ女史と考えられる人物 1840-41年頃》2008年 調色銀塩写真
ベルナール・ビュフェ美術館蔵
©Hiroshi Sugimoto

現実世界の一瞬を切り取る写真。杉本は「写真は現実の本歌取りである」と考えます。

イギリス出身のウィリアム・ヘンリー・フォックス・タルボット（1800-1877）は、科学者・数学者であり、そして現在の写真技術の原型である「ネガ・ポジ法」を発明しました。杉本は、タルボットの初期写真のネガから、ポジ（陽画）を制作しました。こうして、タルボットのネガを「本歌取り」したポジには、約180年前にタルボットが写し取った世界が、反転した状態で表されています。本作では、タルボット家の住み込み家庭教師と考えられる女性の美しい姿が表されています。



左:⑦杉本博司《相模湾、江之浦》
2021年1月1日 ピグメント・プリント 作家蔵
©Hiroshi Sugimoto

右:⑧杉本博司《時間の矢》
1987年(火焰宝珠形舍利容器残欠:鎌倉時代
[13-14世紀] 海景:1980年) ミクストメディア
小田原文化財団蔵 ©Hiroshi Sugimoto

杉本の代表的作品の一つとして知られる「海景」シリーズ。本シリーズは、古代の人間も見ていたであろう「海」を現代に生きる我々も見る事ができるのか、という杉本の問いを契機として、1980年から制作が始められました。「海景」シリーズは、国内外の様々な海と、空との境界をなす水平線によって画面が上下に二分されています。いずれも、静謐さを感じさせる広大な海と空が写し出されていますが、場所や時間などによって海がみせる表情は異なります。本展では、杉本にとって縁の深い、相模湾の江之浦の海を写した作品が初出品されます。

また、《時間の矢》は鎌倉時代の舍利容器（釈迦の遺骨を入れる容器）に海景を組み合わせた作品です。本作で、杉本は初めて古美術と自身の作品を合体させました。杉本にとって古美術は、現代美術と同じく、世界と歴史を探索する術であるといいます。鎌倉時代の時代精神を、現代に生きる杉本が自身の内側に取り込み、新たに生み出した、まさに杉本による「本歌取り」を象徴する作品のひとつです。



写真作品を屋外に展示する一日光にさらされ、紫外線をあび、気温差のある環境での展示は、通常、作品保護の観点から避けられます。しかし、杉本は作品が劣化していく過程そのものを観察するという試みを1990年代から行ってきました。この試みは、ある意味で作家の意図に反し、作品自体にはほとんど変化が見られなかったといいます。これは杉本の現像処理の精度の高さゆえのことでした。一方で、天候や落石などの理由により、展示のために使用している防水ケースが損傷し、水害にあった作品も一部存在します。杉本はこの劣化や腐食にも美を見出しました。こうした作品を観ることで、我々も光や時間、環境の中でのうつろいや変化に対する杉本の眼差しを共有することになるでしょう。

⑨杉本博司《Time Exposed: 地中海、ラ・シオタ》1989年-現在 銀塩写真 作家蔵 ©Hiroshi Sugimoto



全場面一挙公開 ⑩《法師物語絵巻》(部分) 15世紀 紙本着色 小田原文化財団蔵 ©Hiroshi Sugimoto

これまで公開される機会が少なかった《法師物語絵巻》。本展では、8mを超える全場面を一挙に公開します。また、本作の第7場面「死に薬」は、和尚が、自身の香の粉（麦こがしと考えられる）を欲しがると小法師に「死に薬」であると言って与えなかったが、その後、和尚の鉢を割ってしまった小法師が「償いに死の粉を」と食べたが死ねないと泣く、というストーリー。杉本は、この「死に薬」を狂言演目「附子（ぶす）」の本歌と捉え、狂言に置き換えました。（狂言公演は11月9日（木）渋谷区文化総合センター大和田4F さくらホールにて開催。詳細は本プレスリリースのイベント欄をご覧ください。）

◎ 会期中イベント

1 Noh Climax 上映×スペシャルトーク

日時:9月18日(月・祝)午後2時～(約2時間)

会場:地下2階ホール

杉本博司×大島輝久(能楽師 シテ方喜多流職分)
×足立寛(小田原文化財団)

* 約30分の登壇者によるトークののち、映像作品「Noh Climax」を上映予定

* 無料(要入館料)

* 定員60名(要事前申込、応募者多数の場合は抽選)

2 記念講演会「杉本博司の四方山話」

日時:10月29日(日)午後2時～(約1時間30分)

会場:地下2階ホール

講師:杉本博司

* 無料(要入館料)

* 定員60名(要事前申込、応募者多数の場合は抽選)

館内建築ツアー

白井晟一設計の美術館建築を職員がご案内します。

9月22日(金)、29日(金)、10月6日(金)、13日(金)、
20日(金)、27日(金)、11月3日(金・祝)、10日(金)

各日午後6時～(約30分)

* 無料(要入館料) * 各回定員15名

* 事前申し込みの必要はありません

杉本狂言 本歌取り『法師物語絵巻 死に薬～「附子」より』^{〈さびら〉}『茸』

本展出品作《法師物語絵巻》を、杉本博司独自の解釈による本歌取りをした『死に薬～「附子」より』。これに加えて本公演では、杉本がデザインした茸の笠も登場する『茸』も上演します。杉本の「本歌取り」に基づく古典芸能の世界をお楽しみください。(出演:野村万作、野村裕基ほか)

日時:11月9日(木)午後7時(午後6時30分開場)

会場:渋谷区文化総合センター大和田4F さくらホール(渋谷区桜丘町23-2)

料金:全席指定 4500円(税込)チケット発売日:8月21日(月)午前10時から

チケット取扱(プレイガイド):ネット予約・チケットぴあ<https://t.pia.jp>・ローチケ<https://l-tike.com>・イープラス<https://eplus.jp>

* 渋谷区民先行優待販売もあります。お問い合わせは、渋谷区文化総合センター大和田ホール事務室まで。
tel: 03-3464-3252(午前10時～午後7時)

◎ 杉本狂言公演に関するお問い合わせは、(公財)小田原文化財団まで。

tel: 0465-42-9170(午前9時～午後5時/水曜日、臨時休館日を除く) email: info@odawara-af.com

1 上映×スペシャルトーク・2 記念講演会 申込方法

往復はがきまたは当館HPの申込フォームにて承ります。

※1通または1回のお申込みにつき1名のみ申込可。

応募者多数の場合は抽選となります。

[往復はがき]

〒・住所・氏名(ふりがな)・日中連絡のつく電話番号・参加希望のイベント名をご記入の上、松濤美術館各イベント係まで。

[申込フォーム]

当館HPの申込フォームで、各イベントを選んでお申込みください。7/1(土)午前10時から受付開始。

※迷惑メール等の受信制限をされている方は、事前に当館

からのメール「@shoto-museum.jp」が受信できるようにドメイン設定をお願いいたします。

応募締切:

「9/18 上映×トーク係」8/31(木)必着

「10/29講演会係」9/30(土)必着

申込フォームは両イベント各日午後11時59分まで

学芸員によるギャラリートーク

9月29日(金)、10月14日(土)、22日(日)

各日午後2時～(約40分)

* 無料(要入館料) * 事前申し込みの必要はありません

◎ 開催概要

- 展覧会名** 杉本博司 本歌取り 東下り
HIROSHI SUGIMOTO HONKADORI AZUMAKUDARI
- 会 期** 2023年9月16日（土）－11月12日（日） ※会期中、一部展示替えがあります
前期：9月16日（土）－10月15日（日） 後期：10月17日（火）－11月12日（日）
- 休館日** 月曜日（9月18日、10月9日は開館）、9月19日（火）、10月10日（火）
- 開館時間** 午前10時～午後6時（入館は午後5時30分まで）
※毎週金曜日は午後8時まで（入館は午後7時30分まで）
- 会 場** 渋谷区立松濤美術館 〒150-0046 東京都渋谷区松濤2-14-14
電話：03-3465-9421 <https://shoto-museum.jp>
- 入館料** 一般1,000円（800円）、大学生800円（640円）、高校生・60歳以上500円（400円）、
小中学生100円（80円）
※（ ）内は団体10名以上及び渋谷区民の入館料 ※毎週金曜日は渋谷区民無料
※土・日曜日、祝休日は小中学生無料 ※障がい者及び付添の方1名は無料
**※リピーター割引あり。観覧日翌日以降の本展会期中、有料の入館券の半券と引き換えに、
通常料金から2割引でご入館できます。1枚の入館券につき、1回まで有効です。**
- 主 催** 渋谷区立松濤美術館
- 特別協力** 公益財団法人小田原文化財団
- 協力** 東急株式会社

◇交通案内

- ・京王井の頭線 神泉駅下車徒歩5分
- ・JR・東京メトロ・東急電鉄 渋谷駅下車徒歩15分

※駐車場はございません

◇次回展覧会のご案内

「前衛」写真の精神： なんでもないものの変容 — 瀧口修造・阿部展也・大辻清司・牛腸茂雄

2023年12月2日（土）～2024年2月4日（日）

●会期や開館時間、イベント等変更する場合があります。最新情報は、当館ホームページ等でご確認ください。

報道関係のお問い合わせ

広報担当：西・木原・野城(pr-sma@shoto-museum.jp) 展覧会担当：西・大平

電話：03-3465-9421 FAX：03-3460-6366

- * 画像をご希望の場合は、作品名の前にある番号をお知らせください。 * 画像のご利用後、データは破棄してください。
- * 画像の使用は、本展のご紹介をいただける場合のみとさせていただきます。 * 基本情報確認のため、一度校正をお送りください。
- * 掲載後、掲載誌をご送付くださいますようお願いいたします。